

# 遊ぶ子どもと人間関係

内藤 知美

保育の現場において、子どもの自然で自由な遊びを重視しようとする動きは、近年顕著である。子どもは、自由に遊ぶことによって、さまざまな経験を獲得し整理し、生きていくうえで必要な多くのことを学ぶ。その中でも、遊びを通して、子どもが、人間関係の基盤を身につけるといった事柄は、保育における主要な関心事の一つである。

だが、われわれは、夢中で遊びに没入する子どもの飲

喜に満ちた表情に出会う時、子どもにとって、社会性の獲得・経験といった遊びの有する意味合いよりはむしろ、子どもの生き生きとした表情やその喜びの姿に魅了されるであろう。

遊びの根本的な特性に関する理論の構築を試みたホイジンガは、「一体、遊びの『面白さ』とは、何なのか。なぜ赤ん坊は嬉しがって声を立てて笑うのだろうか。どうして遊ぶ人は、情熱に取り付かれて我をわすれるのか―

(中略) — この遊びの迫力は、生物学的分析をもってしては決して解明されない」と述べ、遊びの本質を「面白さ」に置いた。ホイジンガは、遊びにおいて、遊び手が経験する面白さは、*ardigheid* であり、*ard* (本性) から転じ、これ以上さかのぼり得ないものであると捉えた。

遊びの中に在る遊び手にとって、遊びがいかなる現象であり、いかなる様態を提示するのかといった、遊び手の内的な経験に注目した遊びの研究が進む中、チクセン・トミハイは、遊びと仕事という二分法を脱するという立場から、全人的に行為に没入している時に人が感じる包括的な感覚を、フロー (Flow) と定義した。人は、遊びを初めとした種々の活動の中で、フロー状態に入ることによって、「楽しさ」を感じるという。しかも、それは単に生理的な快 (pleasure) にとどまらぬ、楽しさ (enjoyment) であると述べる。

ともあれ、遊びに没頭している子どもの姿は、楽しそ

うであり、面白そうであり、喜びに満ちたものであり、そこには、遊ぶ子どもたちの「現在」を生きている姿が在り、また、その姿は、周囲のものに対して、何らかの表情を提供している。

ここでは、子どもたちの「遊び」の形式・内容を探ることよりはむしろ、子どもたちの「遊ぶ」姿に注目することによって、「遊ぶ」子どもたちの世界と子ども間の人間関係を、改めて問い直したいと思う。

\*

#### 事例1——一人遊びと遊びの共鳴——

幼稚園に入園して三か月の三歳児の組の中では、お店やさんごっこや「ジュウレンジャーごっこ」が人気を博し、数人のグループで遊びが進められるようになった。

その中で、現在の時点で、S 夫は、他の子ども達との距離を保ち、他の子ども達との相互の交渉は見られない。今日も、お店やさんごっこで遊ぶ数人の集団の傍らで、汽車の線路づくりと機関車ごっこに夢中になってい

る。S夫は、線路の配置の仕方や機関車の移動に新たな工夫を試みながら、熱中した表情をうかべ一人遊びを続けている。

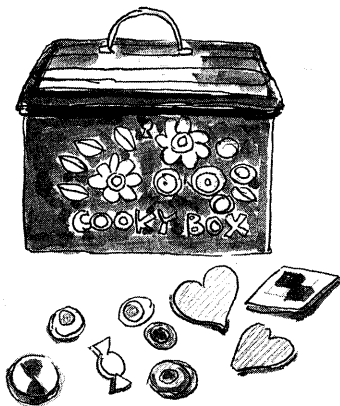
S夫の動きをじっくりと見てみると、興味深いことに、S夫の脇の集団の子どもの遊びが充実し、活動が活発になり、子どもの声が大きく高くなるにつれて、S夫の線路作りの進み具合が早くなったり、機関車を持つ手の動きが大きくなったりする場面が見られた。

\*

子どもの友達関係について考えるとき、われわれは、ややもすると、一緒に遊ぶという子ども間の積極的な関わりをイメージしてしまうことは否めないであろう。しかし、先に掲げた事例のように、距離を置き、それぞれ別々の遊びに熱中しながらも、S夫の傍らの集団の遊びが充実し、子ども達の笑い声や快活なざわめき、陽気な歓声によって満たされるような遊びの雰囲気や場を支配するとき、両者には、遊ぶ者同士の有するリズム

が、共有されていることに気がつくであろう。

両者は、確かに目に見える積極的な相互の関わりではないが、両者の遊びが一生懸命であり、また真剣に遊ぶ



とき、不可視的に、それぞれの遊びの成立に関与しており、遊びの場のかもたすエネルギーなダイナミズムの中に共存しているのである。

このS夫と傍らの集団との関わりは、「遊びに加わり、イメージを共有したり、ルールを理解したり、おなじ経験を大勢の仲間でしたのしむ」といった友だち関係の基底にある関わり方を示してくれているように思える。

さらにもう一例を取り上げよう。

\*

### 事例2——遊びの誘発と見つめる行為——

S子も入園して以来なかなか、他の子ども達との相互の積極的関係をもつことはなかった。今日も、「おはよう」の挨拶以外、九時に登園してから、保育者を含め他者との会話は見受けられない。

一時間が経過しても、他の子ども達の遊びを見ているだけで、その遊びに参加しようとはしないし、また、一人で遊ぶわけでもなかった。ぼんやりとお店やさんごっ

こを見つめ、からだをゆすったりしているだけであつた。

一方、お店やごっこで遊ぶ集団では、Y夫、A子を中心に、バッジを大きい組から二十個余り買って帰り、バッジやさんごっこを始め、M子ら三・四人の子どもがお客となつた。

Y夫は、店でバッジを売ることを止め、直接販売に乗り出し、A子やM子や保育者の身体にバッジをはりつけ、バッジを何とか完売しようと懸命に動きまわつた。そして最後のひとつとなつたバッジを、Y夫は、すぐそばに立っていたS子の胸につけた。

突然のことにややびっくりしたS子だったが、すぐに、うれしそうな表情になつて、手でバッジを何度も触り、握り締めたりした。

その直後、S子が今日登園してはじめて、「先生、バッジやさんに行きたい」と言い、バッジを買いに大きい組へ向かった。「バッジ買って来た」といって、組に

戻ってからは、ピンクと黄色の鉛筆を使って、バッジを買うためのお金を作ったり、バッジの絵を描くという遊びを始めた。

偶然、Y夫が、S子の胸につけたバッジから、S子の今日の活動が膨らみ、バッジ遊び、人形との一人遊びなどの行為が生まれた。

\*

登園後、たいした意味のないような時間を一時間余り過ごしたS子であったが、この時間はS子にとってどのような時間であったのか。

S子は、Y夫を中心として遊ばれるお店屋ごっこ面白さに心魅かれ、Y夫らが、かもしだす遊びの面白さ、遊びの雰囲気を見つめながら共に感じていたのである。もし、そうでなかったら、S子の胸にバッジがはりつけられたとしても、S子自身が能動的に遊びへと関わるきっかけとはならなかったであろう。

S子自身の遊びは、可視的な表現として現れていない

時点で、すでに、S子の中で、芽生え、膨らんでおり、Y夫を中心とした遊びのエネルギーの持つ動きの中へと誘われていたのである。

子どもが無心で遊ぶとき、遊ぶ主体が得る包括的な感覚は、その遊び手の身体や声を通して発せられ、遊びを誘発する。他の子どもは、遊び手の表情をキャッチし、感覚的に受容し、遊びの大胆な迫力に魅了され、遊びへの衝動にいざなわれる。

先の二例が示すように、必ずしも一人遊びや並行遊びといった相互のやりとりが明確にあらわれていない遊びにおいても、園という共存する場に、「遊ぶ」個々の子どもが発する遊びの醍醐味やエネルギーが漂い、子どもは、その場のリズムに身を委ね、共々が喜び楽しみ、広い意味での遊びつつかわる関係を生じる。

その姿を見つめるとき、新生児の対人的行動の中に見られる、相互同期的反応や共鳴動作のような、「リズム

の共有」と名付けられる、人と人との根源的な関わりを想起させられる。

個々の子どもが、充実して「遊ぶ」ということの意味を改めて問い直すとき、一人遊び、並行遊び、集団遊びといった外的な形態に注目し、子どもの人間関係を見るだけでなく、それぞれ個々の子ども遊びの意味を把握、積極的や消極的といった表現以前に、それぞれの子ども関わり方を、大切にしてゆきたいと思うのである。

\*

子ども達の夢中でかつ無心に遊ぶ姿を見ていると、面白さにひたり、他の子ども達を魅了し、遊びを挑発する行為の在り方が、他者の存在をも自然に受け入れられる開かれた形態を示していることに気がつく。

と同時に、自己目的的な遊びの行為に没入し、その行為自体を楽しみ、あたかも他者との関わりからは無縁で自由であることを示しているように思える。

関係から自由に生きつつ、しかも他者と共に生きるという「遊ぶ」行為の在り方の意味を今後深く考えていきたい。

#### 参考文献

- ホイジンガ 里美元一郎訳『ホモ・ルーデンス』  
(河出書房 1971)
- チクセントミハイ 今村浩明訳『楽しみの社会学』  
(思索社 1979)

(お茶の水女子大学大学院)